

MOOCと大学教育のオープン化

北海道大学准教授 重田 勝介

ここ最近、大学内外において「MOOC」という言葉を耳にされた方が少なからずおられるのではないだろうか。数年ほど前から、大学教育のオープン化の一環として、大学レベルの講座をオンラインで公開する取り組みが広がっている。これをMOOC (Massive Open Online Course: 「大規模公開オンライン講座」) と呼ぶ。MOOCは2010年頃を境に急激にインターネット上の学習環境として注目を集めるようになった。MOOC誕生の背景には、2000年頃より始まったインターネット上でオープンな教育を提供する活動「オープンエデュケーション」がある。マサチューセッツ工科大学が提唱した大学講義に関わる全ての資料を無償公開するオープンコースウェア (OCW) や、さまざまな教育資源を無償公開するオープン教材 (OER) の普及が代表的な取り組みである。加えて、単にインターネット上に教材を公開するだけでなく、オープン教材を使い教え学び合うオンラインコミュニティや、オンライン上の学習経験をもとに学習成果を認定する「デジタルバッジ」も普及し始めている。

これらの活動に対して、MOOCは教材だけでなく教育そのものをオープンにする教育サービスだといえる。多くのMOOCでは、大学が提供したコンテンツを教育ベンチャー企業または大学コンソーシアムが公開している。教育ベンチャーの代表例としてはコーセラ (Coursera) があり、大学コンソーシアムの代表例としては「エデックス (edX)」がある。様々なMOOCプロバイダを介して、百を超える大学から数百の講座が開講され、受講者は1千万人を越えるとのデータもある。我が国においても2013年にJMOOCという産学連

携による協議会が立ち上がり、2014年春から講座を開講している。

MOOCでは数週間から数カ月にわたり講座を開講し、受講を完了した者には「認定証 (Certificate)」が与えられる。受講者は自学自習をするだけでなく、全世界に広がる学習コミュニティに参加して相互に学び合う。オンライン講座の各コースには電子掲示板が設けられ、講師やTA (ティーチング・アシスタント) との質疑応答や、受講者同士のコミュニケーションが行われる。受講者同士のつながりはオンラインに限らず、オフラインで受講者が出会う「ミートアップ」というイベントが世界各国で行われている。

加えて、MOOCとして公開された教育コンテンツを大学教育に用いる取り組みも始まっている。反転授業のような授業方法と組み合わせ、知識習得はMOOCを使って自宅で済ませ、講義ではディスカッションや問題解決学習など実践的な演習を行う。これにより学生の修了率が上がったとの事例も報告されている。

今後、大学間でオープンな教育コンテンツを相互に用いながら教育の質と多様性を拡大しようとする取り組みが、国内外においてますます広がるだろう。



edXのウェブサイト <http://www.edx.org/>